

## テスト自動化ソリューション OpenText™ Functional Testing を活用し、グローバル基幹システムの運用効率向上とセキュリティ強化を推進

マツダ株式会社の利用合意を受けているので、他への転載、転用を一切禁ずる。

「走る喜び」を追求し、MAZDAブランドの自動車を世界に展開するマツダ株式会社。同社はデジタル活用とセキュリティ強化の一環として、Oracle EBS環境のテスト自動化ソリューションとしてOpenText Functional Testingを採用。12インスタンス/複数の国にまたがるマルチベンダー体制の大規模なアップデートプロジェクトの実施に続き、さらにテスト工程全体で67%の工数削減を目指し、システムのセキュリティ強化と運用効率化の両立を図っています。

### 事業の成長と価値創造を支える 基幹システムのセキュリティ強化

マツダは広島を起点に、世界130以上の国と地域で自動車の製造・販売事業を展開するグローバル自動車メーカーです。国内外に8カ所の生産拠点と5カ所の研究開発拠点を有し、「前向きに今日を生きる人の輪を広げる」というパーパスのもと、人々に喜びと感動を届けることを目指しています。

また同社は「2030 経営方針」のもと、カーボンニュートラルの実現、電動化の推進、人とITの共創による価値創造、原価低減とサプライチェーンの強靱化といった未来を拓く取り組みの推進を掲げています。この方針に基づき、デジタル技術を活用して持続可能な成長と競争力の強化を目指しています。特にITコストの構造改革では固定費の削減を図りつつ、より戦略的な投資に資本を振り向けることで、業務全体の効率化と最適化を進めています。

一方で、デジタル技術の活用に伴って不可欠なのが、近年増加しているセキュリティインシデントの脅威への対応です。「この課題に対処するため、マツダグループ全体で『セキュリティファースト』を掲げ、堅牢なアプリケーションやインフラの構築/強化に取り組んでいます」と語るのは、補修部品のグローバルサプライチェーンにおけるシステム化や経営管理領域のDXを担当する、MDI & IT本部 グローバルIT

業務部 システム戦略統括グループ 主幹エンジニアの坂巻達也氏です。

マツダは業務提携をしていたフォードとの関係が変化し、独自のシステム構築が急務となった2010年頃からOracle EBSを本格導入し、海外の生産および販売拠点のシステム化を推進。パッケージを活用することでスピーディにグローバルシステム統一を進め、補修部品のサプライチェーン、財務会計、購買分野の基盤を整備してきました。

こうして7カ国12インスタンスのOracle EBS環境を展開してきた同社ですが、バージョンアップについては作業負荷や膨大なテスト工数が課題となり、費用対効果の観点からこれまで見送っていました。しかし世界的なセキュリティインシデントの増加を受け、2019年頃より方針を転換。サイバー攻撃の未遂事案が発生したこともあり、マツダグループ全体において「セキュリティファースト」を掲げ、Oracle EBSを含むシステムのバージョンアップを積極的に進めることになりました。

### コスト効果とグローバル対応を評価し OpenTextのテスト自動化ソリューションを採用

バージョンアップを推進する方針は、Oracle EBS以外のアプリケーションやミドルウェア、プラットフォーム全般にも共通です。さらにセキュリティ強化/固定費低減の一環として、オ

### 事業内容

乗用車の製造、乗用車・トラックの販売など

### 企業名

マツダ株式会社

### ビジネス課題

- ・グローバル12インスタンスのOracle EBS環境のアップデート
- ・セキュリティインシデントへの対応強化
- ・膨大な変更作業とテスト工数の負荷削減
- ・複数の国にまたがるマルチベンダー体制での保守運用

### ビジネスソリューション

- ・OpenText™ Functional Testing

### ビジネスメリット

- ・テスト実行工程で95%の工数削減
- ・前後工程を含むテスト全体で67%の工数削減見込み
- ・マルチベンダー環境で標準化されたテスト運用

ンプレミスからクラウド環境への移行も同時に進めることになりました。

しかし、Oracle EBSの複数層にわたる更新作業、12のインスタンスをそれぞれ異なるパートナーが支援する体制で行うプロジェクトはかなりの複雑化が予想されました。坂巻氏は保守運用体制について「12のOracle EBSインスタンスのうち、北米の一部はインドのオフショアベンダーが運用を担当しています。また、その他のインスタンスは中国と日本のベンダーが管理しており、複数の国にまたがる複雑な体制となっています」と語ります。

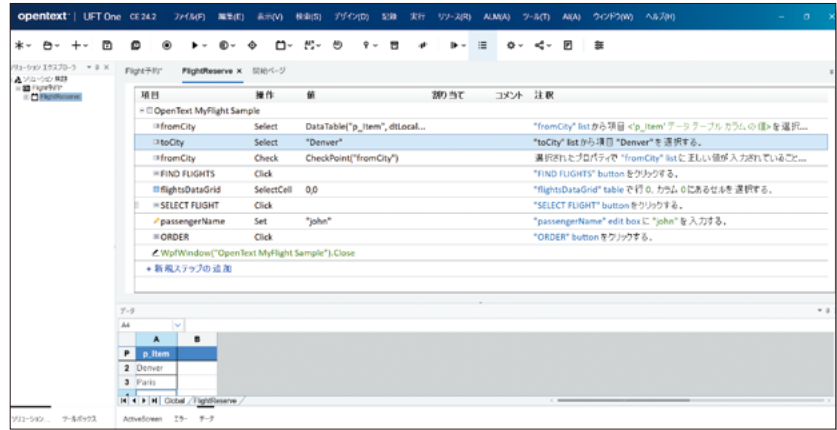
このようなOracle EBS環境のテスト自動化ソリューションとしてマツダが選んだのが、OpenText Functional Testingでした。同社では以前にも運用コスト削減を目的にこのツールの導入を試み、テストシナリオの標準化やスクリプト開発を進めましたが、バージョンアップの見送りや機能改修機会の少なさから、テストの頻度自体が低い状況下、十分に活用されませんでした。しかしセキュリティファースト方針を受けて、テスト自動化の再チャレンジを決定します。「前回の導入時から他のソリューションとの比較も行っており、コスト面などで優れていると判断していたため、再活用を決めました」(坂巻氏)

OpenText Functional Testingの導入にあたり、Oracle EBS環境の事前調査を4カ月、計画策定を約8カ月で実施。バージョンアップ自体は、12のインスタンスを4つのフェーズに分割し、2年以上かけて実施しました。各拠点で9日間程度のシステム停止が必要となり、会計や受発注業務が完全に停止するため、拠点ごとの調整は難航したといいます。それでも、このプロジェクトを通じてバージョンアップが可能な環境が整備され、クラウド移行も実現しました。

### システム運用品質を向上し さらなる効率化を目指す

坂巻氏は、今回のテスト自動化ソリューション導入におけるOpenText(導入当時はマイクロフォーカスエンタープライズのチーム)の支援について、3つの観点から評価しています。第1に、ツール自体が世界各国で導入実績があるうえ、インド、中国、日本といった複数国にまたがるマルチベンダー体制でも対応可能であるグローバル性です。第2に、Application

図:大規模テストを支えるOpenText Functional Testing



### 対象アプリケーションの操作を記録し、自動スクリプト化

Lifecycle Management (ALM) サーバーを設置することで、複数の環境やアプリケーションに柔軟に対応できる汎用性です。そして第3に、充実したサポート体制のもと、運用中の課題や問題への迅速な対応を挙げています。

今回のプロジェクトにおいてOpenTextは、サーバー構築と技術トレーニングの支援をするプロフェッショナルサービスも提供しました。「サーバー構築は一部手間取る場面もありましたが、迅速な対応により工期限内に完了できました。トレーニングを経て各国のチームが短期間で操作方法を習得し、スクリプトの開発・実行もスムーズに進めることができました。導入後はサービスリクエストを通じて動作の不安定さやパフォーマンスの課題に迅速に対応いただき、各国のベンダーも高く評価しています」(坂巻氏)

2024年12月現在、OpenText Functional Testingと関連モジュールを用いた自動化は全体の30%で、残る70%については2025年2月末までの完了を予定しています。テスト自動化について坂巻氏は「テストの実行部分では約

95%の工数削減が可能であることが確認されました。さらに、インプットデータの準備や結果の記録といった前後の工程も含めて、約67%の工数削減を見込んでいます」と語ります。

今後、マツダではOpenText Functional Testingを継続的に活用し、テスト効率を高めていく予定です。リグレーションテストに加え、機能改善やユーザーテストへの応用によって、本番運用の工数削減を視野に入れた活動も構想中です。データ準備には一部手作業も残っていますが、シナリオに応じた自動データ生成ができれば、エンドツーエンドでテストの効率化がさらに進む見込みです。

坂巻氏はセキュリティを強化したデータの活用が、最終的に顧客への価値提供につながると展望しています。「システムのセキュリティ担保は企業の責任である一方、最小限のコストで維持していくことも重要です。自動化ソリューションを活用してコストや期間を短縮しながら持続可能な仕組みを確立し、お客様への価値提供につながっていきます」

### オープンテキスト株式会社

Tel: 03-4560-7704 Email: jpmkt-group@opentext.com  
https://www.opentext.jp

### マイクロフォーカスエンタープライズ株式会社 (OpenText グループ)

https://www.microfocus-enterprise.co.jp/